ファッション主義の精神とプロテスタンティズム

井上 章一

近代の日本社会は、けっきょくキリスト教をうけいれなかったと、よく言われる。プロテスタントとカトリックの信者は、その両者をあわせても、日本人ぜんたいの1%にみたない。半数ちかくの人々が入信しているとされる現代の韓国とくらべ、その不振ぶりはきわだつ。鈴木崇巨の『韓国はなぜキリスト教国になったか』（2012年）は、そのことを対比的にえがいている。また、日本のキリスト者は、キリスト教を歪曲してうけとめたとも、しばしば語られる。日本で信仰されているそれは、日本側の諸事情でねじまげられてきたと評されることも少なくない。佐治孝曲の『土着と挫折――近代日本キリスト教史の一断面』（1991年）は、賀川豊彦にこだわりつつ、標題からもわかるように、そうした部分へ光をあてた。マーク・R・マリンズの『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（高崎恵訳、2005年）は、日本におけるキリスト教の土着化を論じている。その第8章は「何がキリスト教移植を阻むのか」の分析にあてられた。

詳述はさけるが、近代日本のキリスト教受容を、キリスト教研究や宗教学の講壇学説は、否定的に論じてきた。国際日本文化研究センターの共同研究でも、この問題へ、正面からいどんだことがある。「日本人はキリスト教をどのように受容したか」（代表山折哲雄　1993年～1996年）がそれである。そして、この研究会も、日本がキリスト教になじめず、ゆがめてうけとめたことを、強調した。

だが、こうした取り組みの大半は、信仰のありかたに分析のメスをむけている。キリスト教を受容した日本社会そのものを、とらえようとはしていない。信仰心こそいだかないが、良い宗教としてうけとめている人びとからは、目をそむけがちである。

卑近な例をあげる。

日本人は、しばしば素行のおさまらないキリスト教信者を、こうなじる。「あの人は、クリスチャンなのに浮気をしている」、「毎週教会へいくような人なのに、万引きをやってしまった」、等々と。だが、仏教や神道の信者には、まずこういう物言いをぶつけないだろう。じっさい、以下のような口ぶりを聞くことは、とうていありえない。「あの人は、浄土真宗なのに不倫をはたらいている」、「神社での浄めには熱心な人だが、不正に手をそめた」。

それだけ強く日本人は、キリスト教に高い倫理性を期待していることが、よくわかる。すくなくとも、仏教や神道より信頼していることは、うたがいない。その期待感は、欧米人がキリスト教によせるそれよりも、ずっと高かろう。

江戸時代がおわるまでは、淫祠邪教（いんしじゃきょう）だとみなされてきた。そんな宗教が、百数十年ほどのあいだに、倫理的な宗教へと変貌をとげている。いかがわしい宗教だとは、もう思われなくなっているのである。

なるほど、明治以後の日本社会は新参の宗教を、しばらくけむたがったろう。弾圧をくわえたことも、なかったわけではない。その過程で歪曲を余儀なくされもした。キリスト教研究の学術世界が、もっぱらそういう側面に光をあててきたことも、すでにのべたところである。

だが、この宗教が肯定的に受容されていく経緯には、あまり目がむけられない。その点で、講壇宗教学にはかたよりがある。否定面ばかりをながめすぎてきたと、そう言わざるをえない。

「学生時代」（1964年）という歌――いわゆる流行歌曲のひとつだが――を、ある世代以上の日本人はたいてい覚えている。ペギー葉山がうたって、一種の国民歌謡にもなった。小学校が、音楽の授業でこの曲をとりいれだしたのは、1980年代からである。その唄い出しは、つぎのようになっている。

〝蔦のからまるチャペルで祈りをささげた日……。

ミッションスクール出身の女性が、学生時代を回想する。その様子が、情感をこめてうたわれる。のみならず、20世紀後半の大衆社会も、これを喝采でむかえ、もてはやした。

しかし、仏教系の学校を出た女性が、少女時代をふりかえる曲はない。たとえば、以下にしるすような歌詞は、流行歌曲にいっさいとりいれられてこなかった。おそらく、企画の場にさえもちだされてはこなかったろう。

〝お香のけぶる本堂でお経を詠じて念じた日……。

日本の大衆社会は、ミッションスクールを出た女性に魅力を感じている。そして、仏教系の学校でまなんだ女性には、魅了されてこなかった。キリスト教のほうが、仏教よりチャーミングだとみなされている。期待が高いのは、倫理方面だけに限らない。人の心をとりこにする、ひきつけるその度合いでも、より優位におかれている。「ロザリオ」という響きには、「数珠（じゅず）」という音のもちえない輝きがあると言わざるをえない。

京都に京都女子大という、西本願寺のかかわる仏教系の学校がある。1990年代のなかごろに、私はそこへかよう女子大生から、「3B」という言いかたをおしえられた。京都女子大へかよう学生は、自分たちの学校を「3B」と自嘲気味に評価するのだという。どうせ、自分たちは3つのB、「貧乏」「ぶさいく」「仏教」だ、と。仏教の学校だから、不美人でみすぼらしく見えるのもしかたがないというのだというのである。

そして、彼女は同じく京都にあるミッション系の同志社女子大学を、「3K」と評価した。すなわち、「金持ち」「かわいい」「キリスト教」と。仏教系へかよう女子大生たちは、キリスト教の学校にこそきらきらした美人がいると言っていたのである。

もちろん、この「3B」と「3K」が実情をそのまま反映していると言いたいわけではない。京都女子大生の「3B」という自己認識も、彼女らがそうひがんでいるだけの話だろう。ミッション系の同志社女子大生が、京都女子大生を「3B」だとあなどっているわけではあるまい。まあ、陰ではそう見下しているのかもしれないが。

ただ、仏教側の女子大生がそう想いこんでいるらしい点は、重要である。自分たちは女性としての魅力で、キリスト教の女子大生にはりあえない。そう仏教のほうをひがませる何かが、日本社会にはあることをしのばせる。

ざんねんながら、女子大生のルックスを大学ごとにくらべたデータなどというものはない。仏教校の慨歎は、それだけの嘆きにあたいする背景をもつ、そう言いきることは困難である。

すくなくとも、実証的には不可能だと言うしかない。複数の観察者が、大学の校門あたりで、「かわいい」娘の出現率をはかり、あとでその平均値をだすことも、技術的にはできる。しかし、そうした調査が、倫理的にゆるされるとは思えない。

とはいえ、間接的にならその比較をこころみうる資料はある。いくつかのファッション雑誌からおしはかることは、できなくもない。

日本のファッション雑誌は、よく読者モデルとよばれる女性を、グラビアページに登場させてきた。モデルクラブに所属する職業モデルとはちがう、読者のなかからえらばれる有志の素人モデルたちを。そして、彼女たちの多くは大学にかよう女子大生たちである。さらに、雑誌は女子大生たちの所属する大学名を、しるしてきた。

こういう雑誌を見ていると、読者モデルをおおぜい輩出している大学のあることが、読みとれる。そのいっぽうで、まったくモデルをださない大学のあることも見えてくる。これを統計的に検討していけば、大学ごとのモデル出現量を、具体的な数字にうらづけられたデータを抽出することが可能になる。

さいわい、この点については毎年刊行される『大学ランキング』（朝日新聞社）が、その数字をつかんでいる。もとより、読者モデルの数だけをしらべているわけではない。研究費、競争的資金の獲得、外資系企業経営者の出身大学、等々さまざまな項目で、ランクづけをこころみている。読者モデルについての調査も、それらのうちのひとつでしかないことを、ねんのためことわっておく。

モデルの数をくらべあう。『大学ランキング』は、その資料として四つの雑誌をえらんでいる。『JJ』、『CanCam』、『ViVi』、『Ray』の四誌である。一般にも四大誌としてみとめられており、読者モデルを多用することでも知られ、この選択はまず妥当であるとみなしてよい。

『大学ランキング』は、年度ごとのモデル登場数をつきとめ、ランキングとして整理した。ここでは、そのデータにもとづき、2004 年度から 2017 年度までの集計結果を表示しておこう。この調査は、佐藤八寿子が『ミッション・スクール』（2006 年）でしめした成果の延長上にある。ねんのため、ひとことのべそえる。なお、各年度の数字は、それぞれ、2 年前の実績をしめしている。たとえば、2004 年度の数字は、2002 年度に各大学が輩出したモデルの人数をしめしている。

	大学名（2004 年度）	人数
1	甲南女子大	379
2	青山学院大　m	197
3	慶應義塾大	186
4	日本女子大	158
5	立教大　m	147
6	早稲田大	128
7	東洋英和女学院大　m	121
8	帝塚山学院大　m	116
9	学習院大	95
10	神戸女学院大　m	91

大学名（2005 年度）	人数
甲南女子大	404
慶應義塾大	298
立教大　m	288
学習院大	182
神戸松蔭女子学院大　m	181
日本女子大	175
青山学院大　m	160
成城大	144
日本大	131
明治学院大　m	124

大学名（2006 年度）	人数
甲南女子大	486
慶應義塾大	445
立教大　m	416
神戸女学院大　m	345
青山学院大　m	305
神戸松蔭女子学院大　m	296
学習院大	254
日本女子大	174
明治学院大　m	170
東洋英和女学院大　m	164

	大学名（2007 年度）	人数
1	青山学院大　m	795
2	立教大　m	495
3	早稲田大	402
4	慶應義塾大	326
5	神戸松蔭女子学院大　m	276
6	学習院大	244
7	日本大	196
8	神戸女学院大　m	195
9	甲南女子大	194
10	恵泉女学園大　m	175

大学名（2008 年度）	人数
青山学院大　m	876
慶應義塾大	527
立教大　m	491
早稲田大	424
学習院大	336
日本女子大	334
神戸松蔭女子学院大　m	316
日本大	231
成蹊大	221
恵泉女学園大　m	214

大学名（2009 年度）	人数
青山学院大　m	403
慶應義塾大	374
神戸松蔭女子学院大　m	340
立教大　m	329
成蹊大	249
神戸女学院大　m	286
成城大	249
日本女子大	244
早稲田大	227
学習院大	161

	大学名（2010 年度）	人数
1	神戸女学院大　m	390
2	青山学院大　m	334
3	慶應義塾大	308
4	成城大	277
5	立教大　m	256
6	成蹊大	190
7	玉川大	174
8	神戸松蔭女子学院大　m	168
9	法政大	143
10	日本女子大	139

大学名（2011 年度）	人数
慶應義塾大	341
青山学院大　m	300
神戸女学院大　m	244
立教大　m	240
成城大	188
大妻女子大	182
神戸松蔭女子学院大　m	140
駒澤大[1]	127
明治学院大　m	116
法政大	100

大学名（2012 年度）	人数
青山学院大　m	244
大妻女子大	221
慶應義塾大	214
中央大	209
神戸松蔭女子学院大　m	167
立教大　m	113
神戸女学院大　m	105
上智大　m[2]	92
成城大	90
明治学院大　m	80

	大学名（2013 年度）	人数
1	青山学院大　m	277
2	中央大	238
3	大妻女子大	220
4	早稲田大	156
5	神戸松蔭女子学院大　m	126
6	立教大　m	120
7	学習院大	102
8	日本大	97
9	神戸女学院大　m	74
10	成城大	73

大学名（2014 年度）	人数
神戸松蔭女子学院大　m	181
青山学院大　m	178
中央大	162
立教大　m	160
早稲田大	150
武庫川女子大	141
関西学院大　m	122
金城学院大	117
学習院大	115
神戸女学院大　m	107

大学名（2015 年度）	人数
青山学院大　m	237
立教大　m	178
学習院大	173
慶應義塾大	166
早稲田大	143
大妻女子大	132
神戸松蔭女子学院大　m	128
明治学院大　m	124
フェリス女学院大　m	123
関西学院大　m	98
国際基督教大　m	98
中央大	98

[1] 駒澤大学は仏教系だが、ランクイン。今回の調査では、唯一の例。
[2] 上智大はカトリック系。これ以後、カトリックも散見されるようになる。

	大学名（2016 年度）	人数
1	青山学院大　m	201
2	立教大　m	122
3	慶應義塾大	118
4	早稲田大	113
5	フェリス女学院大　m	97
6	日本大	87
7	学習院大	72
8	上智大　m	60
9	明治学院大　m	59
10	神戸松蔭女子学院大　m 国際基督教大　m	54 54

大学名（2017 年度）	人数
早稲田大	119
青山学院大　m	117
立教大　m	85
日本大	75
学習院大	70
上智大　m フェリス女学院大　m	65 65
明治大	63
日本女子大	45
慶應義塾大	44

年度ごとの上位校を、人数順に十校、いわゆるベストテンを、上記の表はならべている。ミッションスクールには「m」のマークをそえておいたが、その存在感は圧倒的である。学生数の多い、いわゆるマンモス大学とも互角にわたりあっている様子が、読みとれる。じっさい、在校生の数を考えれば、神戸松蔭が早稲田や日大より上にくることは、あなどれない。在校生数を分母において、モデルの輩出率をくらべれば、ミッション系の優位は、よりいっそうきわだとう。

2010 年代なかばごろから、総モデル数が目に見えおちこみだしている。これは、ファッション雑誌というメディアじたいの低迷ともかかわりあう。おそらく、遠方への取材経費もけずられているのだろう。2017 年度のものからは、関西の大学名が姿をけした。ベストテンにランクされたのはみな首都圏、東京近辺の大学になっている。

さらに、このごろは彼女たちが自分をおしだす場も、電脳化されだしている。雑誌ではなく、IT メディアに自己アピールの舞台をうつしていった。その意味で、2010 年代中葉以後のデータを、それ以前と同じようには、あつかいづらい。ファッション雑誌を、「かわいい」の資料としつづけるわけには、いかないだろう。

いずれにせよ、こういう世界におけるミッションスクールの比重は、たいそう大きい。

そして、仏教系の大学は、この 14 年間で上位十校へ、いちどしか名をつらねなかった。「3K」と「3B」の対比は、まんざらあたっていなくもないのである。

もちろん、読者モデルになることと「3K」の「かわいい」が等価であるとは、言いきれない。モデルたちのことは、「かわいい」をメディアへさらすことにためらわない女性と位置づけたほうが、いいような気もする。あるいは、自分の「かわいい」をおしころそうとはしない女性たちである、と。世俗の一般校や仏教校にも「かわいい」人はいるが、ファッション雑誌へでようとしない。そんな傾向だって、形式的にはありうることを、ないがしろにするわけにはいかないだろう。

ただ、かりにそうであっても、ミッション系に「かわいい」をおしだす強さがあることは、うけあえる。他校とくらべれば、そういう女性たちのあつまる度合いが高いことは、いなめない。私は、この点に、日本的なキリスト教受容の重大な一側面がひそんでいると、考える。そ

して、ざんねんながら、日本のキリスト教研究は、そこから目をそむけてきた。

ついでにのべそえるが、今回紹介した上位十校によく登場するミッションスクールは、みなプロテスタントのそれである。「かわいい」人材は、プロテスタントのミッション系に、集中しているのである。まあ、2012 年度の統計からは、すこしずつカトリック校も浮上しはじめているが。

いっぱんに、カトリックとプロテスタントをくらべ、前者のほうが外形に左右されやすいと、よく言われる。式典の形にこだわりやすいのは、カトリックであるとされてきた。あるいは、聖堂の建築美などにも。しかし、ファッション誌への登場をこころざす女性は、はるかにプロテスタント系のほうへむらがりやすくなっている。

このことを、日本におけるキリスト教受容とからめ、どう把握したらいいのか。おそらく、カトリック系のほうが、しつけはきびしそうに見えるのだろう。修道女が尼僧姿でキャンパスをゆききする。そんな光景が、風紀取締を、受験生の女子たちに想いおこさせるのではないか。しかし、プロテスタントの学校は、自由を保障してくれそうにうつる。その差が、モデルの数に反映されているのだと考える。

いずれにせよ、日本のプロテスタント受容史研究は、こういう側面から目をそむけてきた。勤勉精神が、ほそぼそとつたえられた可能性などばかりを、論じている。この小論は、今までの研究が見すごしてきた、しかしある重大な近現代日本社会の一様相をとらえたと、自負している。

どうして、ミッションスクールにかがやかしそうな女子が、あつまったのか。今、理にかなった読みときをほどこす準備はない。だが、ささやかな展望はもっている。ここでも、それを仮説的に提示しておこう。なお、この解釈は、さきほど紹介した佐藤八寿子のそれにもささえられていることを、ことわっておく。

近代日本の女子教育は、良妻賢母の育成をこころがけた。主婦として母としてすぐれた女を、そだてようとした。フェミニズム風に言えば、女の可能性は男権社会によって、一つの枠におしこめられてきたのである。

たしかに、男社会は女にたいして、抑圧的にふるまっただろう。女子教育をうけようとする女たちは、それで良妻賢母という型にはめられたと思う。だが、彼女らをそこへおしこめた当の男社会は、そんな女に性的魅力を、あまり感じなかった。ひとことで言えば、ぬかみそくさい主婦の、その予備軍としてとらえたのである。

性的な魅力に関して、男たちは水商売の女にこれをもとめてきた。妻は良妻賢母の安全地帯に、そして情婦は花街や遊里から調達する。この状態は、遊郭が閉鎖された 20 世紀後半以後も、しばらくつづいたと考える。まじめな妻は女学校の卒業生から、そして遊ぶ女は夜の街にもとめるという状態が。

さて、ミッションスクールはキリスト教の精神で教育がほどこされると、考えられていた。言葉をかえれば、近代日本の良妻賢母主義はあまりおよばない学校だ、と。つまりは、ぬかみそにはなりきらない女学生がおおぜいいるところだと、みなされた。

彼女らに、大日本帝国の男たちがときめいた様子は、近代日本文学史のなかに、読みとれる。佐藤がその事例を、いくつか紹介している。ミッションスクールは、その意味で良妻賢母主義とは対立する女の魅力を、夜の街とわかちあっていたのである。

また、良妻賢母主義をつまらないとみなす家庭は、娘を一般的な女学校におくらなかった。ミッションスクールをえらんで、娘に中等以上の教育をさずけている。そして、そこでははなやかな装いも、比較的うけいれられやすかった。

具体的な検討はまだしていないが、おそらくカトリックの学校は、良妻賢母主義と妥協する度合いが強かったのであろう。もちろん、仏教校も。プロテスタントの学校は、あまりそちらへ校風を合わせなかったのだと思う。ファッションに特化した女子大生が、プロテスタントの学校にむらがりやすくなる。この現代的な趨勢は、今ざっとのべたような女子教育史に、その根があるのではないか。